

陰に隠れた史的批判版ヘルダーリン全集

——ツィンカーナーゲルとその編集

林 英哉

1. はじめに

フリードリヒ・ヘルダーリン（1770～1843年）の作品や書簡を収めた全集には様々な版がある。特に「史的批判版（historisch-kritische Ausgabe）」と呼ばれる、最も大規模な学術編集版に限っても、20世紀中に4種類のヘルダーリン全集が編纂されている。それらの編集方針の差異は編集文献学の歴史を色濃く反映しているため、編集文献学研究でもよく取り上げられる重要な例と見なされている¹。ヘルダーリンの後期詩の手稿を発見したことに加え、ヘルダーリン独特の文体を彼の古代ギリシャ文学からの翻訳と関連づけて論じ、ヘルダーリン研究に大きな功績を残したノルベルト・フォン・ヘリングラートが開始したヘリングラート版（1913～1923年）²。20世紀におけるドイツ文献学の大家であるフリードリヒ・バイスナーによって編集され、20世紀後半のヘルダーリン研究の典拠となると同時に、テキストの時系列的な生成過程を階段モデルによって提示するという試みを行ったシュトットガルト版（1943～1985年）³。手稿の写真を掲載することで、それまで利用が制限されていた手稿を広く読者に利用可能にすると同時に、複数のフォントを駆使して写實的転写（diplomatiscbe Transkription）することで、ヘルダーリンが書いたものを執筆時間ごとに区別しながら読みやすく提示したD・E・ザッター編集のフランクフルト版（1975～2008年）⁴。これら三つはヘルダーリン研究においてよく知られており、特に後者二つは研究の典拠としても頻繁に用いられる。

しかし、残りの一つ、すなわちフランツ・ツィンカーナーゲルが編集したツィンカーナーゲル版（1914～1926年）は、ヘルダーリン研究者ですらほとんど参照することのない最も影の薄い版である⁵。彼自身は「ヘルダーリンの手稿の良き読解者」や「根本的な文献学者」という評価を受けるものの⁶、彼の全集は他の全集に比べて全く目立たない。同時期に編集されたヘリングラート版は、編集者自身の印象的なプロフィール（ヘリン

¹ Vgl. Dierk O. Hoffmann, Harald Zils: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth (Hrsg.): Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte. Tübingen 2005, S. 199–245.

² Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. 6 Bde. Begonnen durch Norbert v. Hellingrath; fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. München 1913–1923.

³ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. 8 Bde. Hrsg. von Friedrich Beißner. Stuttgart 1943–1985. 階段モデルとは、ある特定の箇所のすべてのヴァリエーションを上から下へ時系列順に階段のように並べて示すことで、どのように書き換えられてきたかを示す方法である。

⁴ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. 20 Bde. Hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main 1975–2008.

⁵ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke und Briefe. Kritisch-historische Ausgabe. 5 Bde. Hrsg. von Franz Zinkernagel. Leipzig 1914–1926.

⁶ Hoffmann, Zils: Hölderlin-Editionen, S. 211.

グラートは詩人ゲオルゲに近しくゲオルゲ・クライスにも出入りしており、編集を完遂することなく第一次世界大戦で戦死した)に加え、ヘルダーリンをドイツの祖国詩人に仕立てあげた功績によって、強烈な存在感をヘルダーリン研究において持ち続けてきた。また、後に出版されたシュトゥットガルト版やフランクフルト版は文献学的に優れた質を誇り、編集文献学の領域においても学術版編集における重要な功績として見なされてきた。これらの陰に隠れたツィンカーナーゲル版は、ヘルダーリン研究においてほとんど無視されてきたとまで言えるだろう。

しかし近年、そうしたツィンカーナーゲル版軽視の風向きが変わるきっかけとなりうる出来事があった。詩のヴァリアント(校異)を記録したツィンカーナーゲルによる資料篇(Apparat)と、それに付随する200頁を超える解説が、2019年にハンス・ゲルハルト・シュタイマーによって出版されたのである⁷。また、ツィンカーナーゲル版に関連してやりとりされた書簡も2020年に出版された⁸。こうして、ツィンカーナーゲルによる編集作業の知られざる側面がようやく公になりつつある。

本論文は、こうした近年公開された知見に基づきつつ、日本のヘルダーリン研究においてもこれまで完全なる空白だったツィンカーナーゲルと彼の編集について、その穴を埋めることを目指す。まず、編集者ツィンカーナーゲルについての情報とツィンカーナーゲル版の全体像を提示する。そして彼の編纂した全集がなぜ長い間注目されず、他の全集の陰に隠れた存在だったのかについて論じる。次に、同時代にヘリングラートによって編集された史的批判版全集との関係性について扱う。その際には、ツィンカーナーゲルのヘリングラートに対する対抗心や批判を取り上げる。そして、ツィンカーナーゲルによる資料篇の特徴を具体的な詩のテキストを取り上げて考察する。それによって、ツィンカーナーゲルによる編集の特徴や意義を批判的に明らかにすることが本論文の目的である。

2. 編集者ツィンカーナーゲルとツィンカーナーゲル版全集

まず、編集者であるツィンカーナーゲル自身についての情報を簡単にまとめておこう⁹。彼は1878年にフランクフルト近郊の街ハーナウに生まれた。父は鉄道技師で、母はツィンカーナーゲルを出産する際に命を落とした。そのため彼は、フランクフルトの叔母のもとで育てられることになった。成長したツィンカーナーゲルは、1898年からマールブルクとベルリンで古典文献学とドイツ文学を学び、1904年にマールブルク大学でフリードリヒ・ヘッペルについての論文で博士号を取得した。その後、パリとフィレ

⁷ Friedrich Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. Lesarten und Erläuterungen mit dem Text herausgegeben von Hans Gerhard Steimer. Teil 1: Herausgeberbericht mit Benutzung einer Briefedition von Frank Hieronymus. Teil 2: Edition beiliegend auf CD. Göttingen 2019.

⁸ Franz Zinkernagel: Briefe und Schriften aus dem Nachlass. Hrsg. und kommentiert von Frank Hieronymus. 5 Bde. Basel 2020.

⁹ 以下に記述するツィンカーナーゲルについての情報は Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 13–18 を参照し再構成した。

ンツェに遊学した後、チュービンゲンに移った。女子実業学校で教える傍ら教授資格論文を執筆し、1907年にヘルダーリンの小説『ヒュペリオン』の発展史についての論文で教授資格を得た¹⁰。その後1917年にスイスのバーゼル大学で教授職を得ることになる。ドイツでナチスが政権を握った後、1934年にツィンカーナーゲルはスイス国籍を取得した。彼はすでに1920年の段階で、当時の大学を侵食していた反ユダヤ主義的雰囲気にも否定的な感情をあらわにしていた。しかしその直後の1935年に、彼は57歳で心疾患のため命を落とす。

ツィンカーナーゲルがヘルダーリン全集に携わることになったのは、1907年に教授資格を得た直後に、ヘルダーリン全集出版を企画したインゼル社の代表アントン・キッペンベルクがその編集者として彼に声をかけたことがきっかけだった。二人の間に交わされた書簡によれば、1908年にヘルダーリン全集の出版について会話が交わされたものの、一度は頓挫したことがうかがえる¹¹。その理由としては、1908年から1909年にかけて出版されたマリー・ヨアヒミ＝デーゲ編集のヘルダーリン全集や、1905年にパウル・エルンスト編集によって出版開始され、1909年から1911年にかけてヴィルヘルム・ベーム編集によって増補改版されたヘルダーリン全集と競合することを、キッペンベルクが避けた可能性が推測される¹²。その後、1911年の7月に企画が再始動し、キッペンベルクから再度依頼を受けたツィンカーナーゲルはすぐさま同じ月に契約書にサインをした。彼は博士論文のテーマだったヘッベルの全集を1913年に出版した後、1914年から1926年にかけてヘルダーリン全集を出版することになる。

ツィンカーナーゲル版の構成は以下のようになっている。第1巻（1922年）は詩を掲載している。まず詩の形式ごとに分類され、その内部では年代順に並べられている¹³。第2巻（1914年）は小説『ヒュペリオン』と哲学的・詩学的な論文、第3巻（1916年）は悲劇『エンペドクレスの死』と古代ギリシャ文学からの翻訳、第4巻（1921年）は書簡、第5巻（出版1926年）はそれ以外の補遺（断片的な詩など）とヘルダーリン宛の書簡を収録している。

ツィンカーナーゲル版は「史的批判版」という種類の全集に含まれるが、「史的批判版」という版の形態について、その特徴を確認しておこう。史的批判版とは、手稿や出版された版を含めた複数のヴァリエーションの比較検討によって、誤りのない正統なテキストを再構成することを目指すと同時に、作品の最終的なテキストだけでなく（ほぼ）すべてのヴァリエーションを記録する¹⁴。その際には、ヴァリエーションの記録の他、編集の根拠など

¹⁰ Franz Zinkernagel: Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion. Berlin 2018 (Original: 1907).

¹¹ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 19.

¹² Vgl. ebd.

¹³ 詩は以下の順番で並べられている。「脚韻詩型 (Reimstrophen)」「ブランクヴァース (Blankverse)」「古代詩型 (Antike Strophen)」「長行詩 (Langzeilen)」「自由律 (Freie Rhythmen)」以下略。「悲歌 (Elegien)」は「長行詩」に含まれている。Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 3–16.

¹⁴ Vgl. Bodo Plachta: Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition. Stuttgart 2020, S. 229.

を詳細に説明する注釈を掲載した資料篇が必然的に付随し、それが史的批判版の本質を構成している。

しかしツィンカーナーゲル版は、厳密に言えば、真正な「史的批判版」ではない。その理由は二つある。一つ目は名称上の理由である。ツィンカーナーゲル版はその正式な名称を「批判的歴史版 (kritisch-historische Ausgabe)」という。通常用いられる名称は「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe)」であり、「歴史」が先で「批判」が後に来るが、その順番が逆になっている。「kritisch-historische Ausgabe」というキーワードで文献データベース（例えばドイツの図書館が共同で運営する Gemeinsamer Verbundkatalog¹⁵）を検索しても、他に例がほとんど存在しないほどに珍しい表記である。ツィンカーナーゲルがこの名称を何らかの意図を持って選択している可能性があるが、管見の限り、彼自身がどこかで説明しているわけではない。ツィンカーナーゲルは、1914年のヘリングラート版に対する書評の中で、自身の版とヘリングラート版を合わせて「二つの批判的歴史版」と呼んでおり、ヘリングラート版も「批判的歴史版」と見なしている¹⁶。このことから、ツィンカーナーゲルは「史的批判版」ではなく「批判的歴史版」の方が正しい名称だと考えていた可能性と、順番を入れ替えても同じだと考えていた可能性の二つが考えられる。

確かに単に二つの形容詞の順番が前後しているだけで、意味に大きな違いはないという理解も可能ではあるだろう。しかし文法的に考えるならば、順番が変わることで意味の重点が変わる可能性を無視することはできない。二つの形容詞がハイフンでつながれて名詞を修飾している場合、前半部が後半部を副詞的に修飾しているという解釈が可能だ。つまり、「史的批判」は「歴史的な観点から批判的に捉えること」という意味であり、「批判的歴史」は「批判的な観点から歴史的に捉えること」を意味すると考えることができる。つまり、ツィンカーナーゲルの表現では批判性よりも歴史性の方が版の中心の特徴として捉えられているのだ。批判性が複数の手稿や版の批判を通じて一つの完成版としてのテキスト（編集文献学の用語では「編集されたテキスト (Edierter Text)」¹⁷）を作り上げることを意味するなら、歴史性はテキストの歴史的な発展の過程（同じく「テキストの生成 (Textgenese)」¹⁸）に焦点を当てていると考えることができるだろう。つまり、ツィンカーナーゲル版は史的批判版ではあるが、重点をよりテキストの歴史的生成過程の方に置いていると言える。このことには、彼の教授資格申請論文が『ヒュペリオン』の発展史というテキストの成立過程を扱う実証主義的な歴史研究だったことも強い関係があるように思われる。

そして、ツィンカーナーゲル版が厳密には「史的批判版」ではないと言える二つ目の

15 URL: <https://kxp.k10plus.de>. (Letzter Abruf: 17.11.2023)

16 Franz Zinkernagel [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe unter Mitarbeit von Friedrich Seebaß besorgt durch Norbert v. Hellingrath. 5. Bd.: Übersetzungen und Briefe 1800–1806. München und Leipzig 1913, bei Georg Müller. In: Euphorion 21 (1914), S. 356–363, hier S. 357.

17 ボド・プラハタの語釈では、「編集者によって選択されたテキスト稿であり、ある一つの学術編集版において作者のそのつどの作品を校訂され読むことが可能な形式で提示するよう求められるもの」を指す。Plachta: Editionswissenschaft, S. 228.

18 プラハタの語釈では「テキストや作品の成立プロセス」を意味する。Ebd., S. 231.

理由は、名称に関することよりもさらに実質的であり、さらに重要である。それは、ツィンカーナーゲル自身による資料篇が、大量の原稿が執筆されたものの、出版されなかったことだ。つまり、彼の全集は史的批判版の核を欠いた不完全な状態だったのだ。これが、ツィンカーナーゲル版が陰に隠れた史的批判版になった大きな要因であると見なされている¹⁹。資料篇が出版されなかったのは、同時期のヘリングラート版に商業的に敗北してしまったため、資料篇を出版する機会を失ったからだと考えられている²⁰。ヘリングラート版が資料篇をそれぞれの巻の末尾に置くことでテキストと資料篇を同時に出版したのに対し、ツィンカーナーゲル版は資料篇を切り離してしまった結果、資料篇を出版することすらできなくなり、それによってヘリングラート版に商業的にだけでなく、史的批判版としての質においても後手を踏んだのである。また、インゼル社は当時普及版ばかりを扱い、それまで史的批判版を出版した経験がなかった²¹。この点も売り上げの重視と学術面の軽視につながったのかもしれない。

資料篇を出版することができなかった結果、ツィンカーナーゲル版は、きれいに整理され、「純化されたテキスト」²²しか提示しない、古典的な、言い換えれば古臭い全集であるというイメージが定着してしまった。こうして、ヘルダーリン研究において長く軽視されることになったのである。

3. ツィンカーナーゲルとヘリングラート

ここで、競合相手となったヘリングラートに対するツィンカーナーゲルの対抗心について、さらに詳しく踏み込んでおきたい。ツィンカーナーゲルがインゼル社と編集者契約を結んだ1911年の7月に、ちょうどヘリングラートも「初版への序文」という副題を付けた博士論文を出版し、自身編集のヘルダーリン全集を予告していた²³。そして彼と出版社のゲオルク・ミュラーとの間で出版交渉がなされたのは同年10月だった²⁴。つまりヘリングラート版とツィンカーナーゲル版はまさに同時期に企画と編集がスタートしたのだ。そのため両者は、一つしかないヘルダーリンの手稿を利用する際にも競合することになった。そしてヘリングラート版は出版社の態度にも影響した。ヘリングラート版を商敵として脅威に感じていたインゼル社のキッペンベルクは、はじめはできるだけ多くの大衆に届けるためにヘルダーリン独特の綴りを現代的な表記に改めて出版するつ

¹⁹ Vgl. Ruigi Reitani [Rezension]: Friedrich Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. In: Hölderlin-Jahrbuch. Bd. 41 (2018–2019), S. 251–255, hier S. 251.

²⁰ Vgl. Stefan Metzger, Johann Kreuzer (akt.): Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): Hölderlin-Handbuch. Leben–Werk–Wirkung. 2., revidierte und erweiterte Aufl. Berlin 2020, S. 3–14, hier S. 5.

²¹ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 23.

²² Ebd., S. 222.

²³ Norbert von Hellingsrath: Pindarübertragungen von Hölderlin. Prolegomena zu einer Erstausgabe. Jena 1911.

²⁴ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 20.

もりだった。しかし、文献学的見地からヘルダーリン自身の古い表記を採用することを要望したツィンカーナーゲルとの折衝で時間が取られるのを避けるため、結局は表記を直さずに出版することにした²⁵。つまり、ヘリングラート版が存在しなければ現代的な表記になっていた可能性も十分に考えられるため、その存在がツィンカーナーゲル版のテキスト自体にまで間接的にはあるが関わっていたとすることができるだろう。

編集開始当時、ツィンカーナーゲルは教授資格論文を提出したばかりで、ヘルダーリン全集の編集は彼の文献学者としてのキャリアにとって重要なチャンスであった。そのため、彼が自身より若く未熟なヘリングラートが同じく全集を編集していることに対して怒りを覚えたことは想像に難くない²⁶。ツィンカーナーゲルは、ヘリングラート版の最初の巻が出版された1914年と全巻出版された後の1924年の2回、書評を雑誌『オイフォーリオン』に書いており、ヘリングラート版に対するかなり辛辣な批判を展開している。ツィンカーナーゲルによれば、ヘリングラートは「若輩の初学者」²⁷であり、ヘルダーリンの精神疾患の兆候を無視して無批判的に褒めたたえている、ただの「ヘルダーリンファン」²⁸だった。「実証主義的ヘルダーリン研究の典型的な代表者」²⁹であるツィンカーナーゲルは、ゲオルグ・クライスの詩人崇拜に傾いたヘルダーリン像に対して否定的だったのだ。

ツィンカーナーゲルは資料篇の序文で、「芸術的なものが病的なものの犠牲にすでにどの程度なっているかを完全に確信を持って述べることはできない」ため、「編集者の主観的な考えに門戸が開かれている」と書いている³⁰。しかし、このことはヘルダーリン研究において「危険の源」³¹となってきたという。つまり、ツィンカーナーゲルよりも前の世代は病の影響が見出されうるものを完全に視野から排除しようとし、逆に彼よりも若い世代は病的なものとしてしか見ることができないものまで純粋な芸術作品としてのみ見なそうとするという、二つの極端な傾向の争いが生じているのだ。この若い世代の代表例として、ツィンカーナーゲルの念頭にヘリングラートがあったのは間違いないだろう。しかしツィンカーナーゲルによれば、これらの対立する見方は実際には互いに排除し合うことはなく、ヘルダーリンの精神疾患が顕在化してからも彼は詩人として成長を続けたと考えることで接続可能であるという。「いずれにせよ、ヘルダーリンの生涯にわたる作品の批判的歴史版はそのような可能性による判断を差し控え、できる限り中立であるようにいそしむ方がよい。」³²このようにツィンカーナーゲルは、あくまで文献学者としての立場にとどまり、精神疾患という医学的専門知識を要するものを判断

²⁵ Vgl. ebd., S. 24

²⁶ Vgl. Henning Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“. Die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George. Stuttgart 1992, S. 71.

²⁷ Zinkernagel [Rezension]: Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Hrsg. von Norbert von Hellingrath. 5. Bd., S. 357.

²⁸ Ebd., S. 358.

²⁹ Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“, S. 71.

³⁰ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 25.

³¹ Ebd.

³² Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, 26.

の対象に加えることをしなかった。そうした領域は、1909年に出版されたヴィルヘルム・ランゲ＝アイヒバウムの病跡学的研究などに任せていた³³。この点は文献学者がとるべき慎重な態度として評価できるだろう。

このようにヘルダーリンの精神疾患に関するツィンカーナーゲルの態度は、それができるだけ中立に扱うことで、その兆候を完全に無視するわけではないが、顕在化した後の作品もきちんと評価しようとするものだった。この点で、ツィンカーナーゲルとヘリングラートの態度は大きく異なっていたと言える。ヘリングラート版とツィンカーナーゲル版は、ともにそれまでの他の全集とは異なり、ヘルダーリンの精神疾患の顕在化の前後で詩を区別して掲載することをしなかった³⁴。しかし、ヘリングラートが精神疾患自体を軽視し、一貫した芸術性をヘルダーリンの作品に見出そうとしたのに対し、ツィンカーナーゲルは精神疾患が進行する過程は漸進的で、区切りを特定することは非常に困難であると考えていたことが示すように³⁵、その理由はかけ離れていたのだ。

また、ヘリングラートによる具体的なテキスト編集に関して、ツィンカーナーゲルは表記法の問題を指摘している。ヘリングラートは、手稿が残っておらずヘルダーリン自身の表記法が確認できず、かつ他の箇所とは異なった表記法で印刷されている場合に、できる限り入念にヘルダーリンの表記法を再現したと述べる一方、ソフォクレス翻訳では、植字工や校閲者の影響を意識しつつもヘルダーリン自身の表記法に直して提示しようとし「素朴さ」³⁶もあり、こうした矛盾した態度が批判されている。加えて、句読点のつけ方もヘリングラートは恣意的に行っていると指摘している³⁷。

このようにツィンカーナーゲルは、ヘリングラートが提示するヘルダーリン像そのものに加え、文献学的な側面での未熟さにも噛みついている。確かにツィンカーナーゲルの方がヘルダーリンをより客観的に、実証的に捉えようとしていることがうかがえる。しかし、ツィンカーナーゲル版は資料篇を出版できないという致命的な結果に至ったため、文献学的にもヘリングラート版に大きく後手を踏む結果となったと言える。

33 Wilhelm Lange: Hölderlin. Eine Pathographie. Stuttgart 1909. ヘニング・ボテは、ツィンカーナーゲルとランゲ＝アイヒバウムの二人を 20 世紀初頭の抑制的な実証主義的研究の代表例として論じている。Vgl. Bothe: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“, S. 63–73.

34 例えばパウル・エルンスト編集の全集では、詩が年代順に並べられ、「円熟期の詩 (Gedichte aus der Zeit der Reife) 1796 ~ 1802 年」と「精神錯乱期の詩 (Gedichte aus der Zeit des Irrsinn) 1804 ~ 1843 年」という区別がなされている。Friedrich Hölderlin: Gesammelte Werke. Bd. 2. Hrsg. von Paul Ernst. Jena/Leipzig 1905, S. 316, 319. 同じ出版社から 1909 年に改訂増補版として出版されたヴィルヘルム・ベーム編集による全集は、エルンスト版の構成をほぼ踏襲しており、同様に「円熟期の詩」と「精神錯乱期の詩」という区切り方をしている。Friedrich Hölderlin: Gesammelte Werke. Bd. 2. vermehrte Aufl. Hrsg. von Wilhelm Böhm. Jena 1909, S. 400, 402. マリー・ヨアヒミ＝デーゲ編集の全集では「円熟期 (Zeit der Reife)」、「はじまりつつある錯乱期から (Aus der Zeit der beginnenden Umnachtung)」、「錯乱期から (Aus der Zeit der Umnachtung)」という区分がなされている。Friedrich Hölderlin: Hölderlins Werke. Teil 1. Hrsg. mit Einleitung und Anmerkungen versehen von Marie Joachimi-Dege. Berlin 1908, S. VI.

35 Vgl. Franz Zinkernagel [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe, begonnen durch Norbert v. Hellingrath, fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. 4., 3., 2., 6. Bd. In: Euphorion 25 (1924), S. 274–287, hier S. 279.

36 Ebd., S. 362.

37 Vgl. ebd.

4. ツィンカーナーゲルの資料篇

ツィンカーナーゲル版が出版された時点では収録されなかった資料篇だが、その原稿は彼の死後、家族から委託を受けたヴェルテンベルクの州立図書館に保管されており、出版社との間の書簡はバーゼル大学図書館に保管されていた。資料篇におけるヴァリエーションに関する部分はほぼ完全な状態で、注釈はその半分ほどが残っており、一部バイスナーによってシュトゥットガルト版の編集にも利用された³⁸。そして2019年にシュタイマーの手によって、ようやく公にされた。手書きの資料篇が100年近くもきちんと保管され、それが研究者の手によってきちんとまとめられて出版されたことは、学術版編集とその歴史的発展の研究がドイツにおいていかに重要視されているかを示す証左である。その資料篇に付された「序言」で、ツィンカーナーゲルは彼の資料篇の作成方針を次のように述べている。

それでも編集者が最終的にまだかなりの程度責任を負うことのできるテキストがむしろ提供されねばならなかった。しかしそのためには、ヴァリエーションを収めた資料篇に対し、そのつと前段階を記録するだけでなく、詩人の羽ペンもしくは鉛筆、それどころか指の爪の下で、もともとのテキストから事後的にさらに生じたものも記録するという課題が課されねばならなかった。しかし、この限度設定が新しく行われることが許されるのは、テキストのいかなる個々の箇所においてもというわけでは決してなく、稿全体もしくはそれが達する層に関してのみであることは、こうした問いすべてにそれほど驚くべき無批判性が刻まれていなかったとしたら、おそらくほとんど強調することも必要ではなかっただろう。³⁹

編集者は数多くのヴァリエーションから一つのテキストを構成して提示しなければならないが、すべてのヴァリエーションを記録して読者に提示することによってはじめて、読者に対して編集の責任を果たすことができる。そのため記録すべきものは、筆記用具によって書かれたものだけでなく、指の爪で後からつけられたような跡にまで及ぶ。しかし、それを手稿全体に対して行うことは労力や紙幅の関係で実質的に不可能である。それゆえツィンカーナーゲルは、個々の部分だけに関わるものを対象からはずし、稿全体に関わる部分だけに限定することを、強調するまでもない当然のことと見なしている。ただし、ここで見逃してはならないのは、何が全体に関わるものであり、何が関わらないのかは、やはり編集者の判断に依存することだ。なぜその判断を下したのかを逐一記録するのなら、結局はすべてを記録することになる。ツィンカーナーゲルはここで、資料篇を作成する上での袋小路に至っていると言えるだろう。

ツィンカーナーゲルが残した手稿は全体で4,350ページ程度あり、詩に関するものは

³⁸ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 9.

³⁹ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 26f.

そのうちの2,000ページ程度、つまり45パーセント程度に及ぶ⁴⁰。ツィンカーナーゲルがつけている注釈は、解釈に踏み込んだ多様な注釈というよりも、ヘルダーリン自身の別のテキストや他の作家のテキストとの間の明確な関連についてのなどの具体的で簡潔な説明にとどまっている⁴¹。それでもこれほどの量に及んでいるのは、ツィンカーナーゲルが主要なヴァリエーションを厳選して記録するのではなく、ヘルダーリン自身による省略や削除、修正などをできる限り多く記録しているからだ。また、そのドキュメンテーションの方法も、シュトゥットガルト版のような階段モデルやフランクフルト版のような写真や写実的転写を使うことなく、記述的に細かく説明されている。例えば詩『オーク (Die Eichbäume)』の8行目「そして汝らは、陽気に自由に、力強い根から自らを伸ばす (Und ihr drängt euch fröhlich und frei, aus der kräftigen Wurzel)」⁴²は以下のようにになっている。

16 *ihr drängt*] darüber *noch* . *ihr* St₁ *fröhlich*] *trotzig* darüber *frö[hlich]* gestr. über diesem *muthig* St₁ *frei,*] *frei* St₁ H [mit Blei: »228,17 [= 16] f. *der kräftigen*] *kräftiger* u«, darunter Fragezeichen] 17 *Wurzel,*] *Wurzel* St₁ H⁴³

ツィンカーナーゲル版では各行が途中で改行され、一行が二行に分けられているため、8行目は16行目と17行目に相当する。St₁はシュトゥットガルト四つ折りノート (Stuttgarter Quartheft) に書かれた稿を指し、Hはホンブルク四つ折りノート (Homburger Quartheft) に書かれた稿を指す。この説明によれば、16行目に関して、St₁では「*ihr drängt*」の上に「*noch . ihr*」と書かれており、「*trotzig*」の上に書いてある「*frö[hlich]*」が線で消され、この上に「*muthig*」と書かれている。St₁とHの両方で「*frei,*」は「,」なしの「*frei*」のみである。「*mit Blei*」から「*Fragezeichen*」まではツィンカーナーゲルが鉛筆 (Blei[stift]) で付記したメモの内容を表しており、228頁の17行目 (正確には16行目) 以降の「*der kräftigen*」は「*kräftiger* u」から修正されたことを示しているが、その下に「? (Fragezeichen)」がつけられているため、ツィンカーナーゲルが読み取りに確信を持てなかったことを意味している。17行目に関しては、St₁とHの両方で「*Wurzel,*」は「,」なしの「*Wurzel*」と書かれている。このように、ツィンカーナーゲルの資料篇は、どの稿でどの文言がどのように修正されているかを詳細に記録しているのだ。

しかし、手稿の状態を詳細に記録している分、修正経過の提示の仕方が煩雑で、一目で簡単にわかるようにはなっていない。解読することを読者に求める資料篇になっているのだ。こうした分かりにくさを克服するために、後に出たシュトゥットガルト版は階段モデルを用いて次のように記述している。

⁴⁰ Vgl. Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 10.

⁴¹ Vgl. ebd., S. 219f.

⁴² Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 565.

⁴³ Ebd., S. 566.

(1) Um

(2) Und (a) ihr drängt euch

(b) noch drängt ihr euch (α) trotzig(β) frö<hlich>(γ) muthig und frei aus der kräftigenWurzel H^1 ⁴⁴

上下に並んでいるもののうち、一番下に書かれている文言が最終的なテキストであり、すべて合わせると「Und noch drängt ihr euch muthig und frei aus der kräftigen Wurzel」となる。このようにシュトットガルト版は、どのように書き換えられていき、最終テキストが何であるのかが一目で概観できるように記載している。しかしそれゆえに、ツィンカーナーゲル版にはあった情報（どの稿でどのように書かれているか、線で消されているか、どこに修正の文言が書かれているかなど）が不明になり、加えて訂正がいつ、どの段階でなされたのかも示されない（これはツィンカーナーゲル版も同様である）。

ツィンカーナーゲル版とシュトットガルト版との記述の差異としては、シュトットガルト版が「Und」から「Um」への修正を示していること、ツィンカーナーゲル版が書き加えられた「noch」をテキストとしては無視していること、 St_1 では「frö[hlich]」が消されて「muthig」と書き換えられているにもかかわらず、ツィンカーナーゲル版のテキストにはそれが反映されておらず、「fröhlich」が採用されていることが見受けられる。シュトットガルト版は一番下の文言が修正を経た最終的なテキストであると見なしていることを明白に示しているが、ツィンカーナーゲル版はなぜその文言を最終的なテキストとして採用したのかを明らかにしていない。

このように不十分な箇所もあるものの、全体としてツィンカーナーゲルの資料篇は、わかりやすさよりも情報の多さや詳しさを重視していると言える。ここでは手稿を再現できるような形でその歴史的な生成過程を示すことが試みられており、それゆえこの全集は歴史性を強調する「批判的歴史版」という特殊な名称がつけられたと言える。シュタイマーによれば、「手稿の再現可能性（Wiederherstellbarkeit der Manuskripte）」がツィンカーナーゲルの編集上のスローガンとなっていた⁴⁵。これは、20世紀後半の学術版編集の考え方も結びつく。例えば、C・F・マイヤー全集（1958～1998年）を編集するなど、20世紀後半の編集文献学をリードしたハンス・ツェラーは、ページ内部の正確な位置情報に加え、消去が行われたかどうか、どのように行われたか、消去されたもの代替がページのどこにあるかといった情報を資料篇に記録することを通じて、資料篇から手稿へ「再翻訳」⁴⁶できることを重視した（そして彼のヴァリエントの記録方法も分かりにくいという批判を受けた⁴⁷）。したがって、ツィンカーナーゲルの編集方針は当時

⁴⁴ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Hrsg. von Friedrich Beißner. Bd. I/2. Stuttgart 1947, S. 501.

⁴⁵ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 1, S. 9.

⁴⁶ Hans Zeller: Zur gegenwärtigen Aufgabe der Editionstechnik. Ein Versuch, komplizierte Handschriften darzustellen. In: Euphorion 52 (1958), S. 356–377, hier S. 362.

⁴⁷ Vgl. Plachta: Editionswissenschaft, S. 46.

としては先進的なものだったと言えるだろう。ツィンカーナーゲルが、テキストの個別の箇所のみ関する部分は含まないという留保は付けつつも、ヘルダーリンの記述をできる限り再現しようとすることで示した手稿への忠実さは、ツィンカーナーゲルの文献学者としての姿勢をよく表わしていた。これは、当時出版された、きれいに整理されたテキスト版だけを見ているだけではわからないことであり、ツィンカーナーゲル版の意義は、資料篇を見ることで初めて明らかになるのである。

5. ツィンカーナーゲルの編集—『あたかも祝いの日に…』を例に

次にツィンカーナーゲル版の特徴について、さらに他の具体例を見ながら検討したい。ここでは詩『あたかも祝いの日に…』(1800年?)を取り上げる。この詩はヘリングラートによってシュトットガルトの州立図書館で発見された、シュトットガルト二つ折りノート(Stuttgarter Foliobuch)と一部シュトットガルト四つ折りノートに書かれた手稿のみが存在している。この詩には二つの稿が存在するが、後に書かれた第2稿の方が通常取り上げられる。これにはタイトルはつけられておらず、詩の冒頭部である「あたかも祝いの日に…(Wie wenn am Feiertage...)」という名前で呼ばれるのが現在の主流となっている。ただし、ツィンカーナーゲルは『聖なる火(Das heilige Feuer)』というタイトルをつけ、それを括弧に入れて仮題であることを明示したうえで掲載している。

この詩の大きな特徴は稿の末部にある欠落部だ。その箇所の周辺には多くの修正の跡も残されており、そのことからテキストが未完の状態になっていることがわかる。つまり、この詩は統一的なテキストとしてヘルダーリン自身の手によって完成されたわけではないため、編集者の判断を多分に含んだ「編集されたテキスト」が構成されなければならないのだ。したがって、欠落して断片化している部分も本文に組み入れるかがこの詩を編集する上での大きな問題となり、ここにツィンカーナーゲルとヘリングラートの差異が表れてくるのである。まずツィンカーナーゲル版のテキストを確認する。テキストの終盤から最後までを引用する。

というも我々が純粋な心でありさえすれば、
 子どもたちのように、我々の手が無垢ならば、
 父の光線、その純粋なものは、焦がすことはないからだ、
 そして深く打ち震えながら、より強き者の苦悩を、
 とどまることのない嵐の中で高みより落ちてくる苦悩を、
 とともに苦悩しつつ、永遠の心はそれでも確固としたままなのだ。

しかしつらい! もし […] によって

 そして私がたとえ、
 天上の者たちを見るために近づいたのだと言っても、

彼ら自身を⁴⁸、彼らは私を生ある者たちみなの下深くへ投げる、
この偽りの司祭を暗闇へ、私が
警告の歌を聞き分けの良い者たちに歌うようにと。
Denn sind nur reinen Herzens,
Wie Kinder, wir, sind schuldlos unsere Hände,
Des Vaters Stral, der reine, versenget nicht,
Und tieferschütterte die Leiden des Stärkeren,
Die hochherstür[zen]den in unaufhaltsamen Stürmen,
Mitleidend, bleibt das ewige Herz doch fest.

Doch weh mir! wenn von
.
.
Und sag ich gleich,
Ich sei genaht, die Himmlischen zu schauen,
Sie selbst, sie werfen mich tief unter die Lebenden alle,
Den falschen Priester ins Dunkel, daß ich
Das warnende Lied den Gelehrigen singe.⁴⁹

このようにツィンカーナーゲル版では欠落部を含めてテキスト化されている。欠落部の前では、詩人である「我々」が神の靈感を得て詩を作ったとしても、その神の靈感によって身を焼かれることはないという、使命を果たすため詩人が持つ強さが歌われる。対して欠落部以降では、神々によって暗闇へと投げられる詩人としての「私」の弱さが表現される。このように欠落部を挟んで、詩の雰囲気肯定的なものから否定的なものへ大きく転換するのである。

ヘルダーリンの手稿をそのまま活字化した、フランクフルト版の写実的転写では、次のようになっている。フォントの違いは、インクの濃さや文字の太さに細かな差異があることを表し、書かれた時期の差異を示唆している。括弧でくくられた部分はヘルダーリンによって横線が引かれ、削除されたと見なせる箇所である。

48 この部分の原語は「sie selbst」である。「sie」を4格として理解すれば、前の行の「天上の者たち」の言い換えとして「見る」の目的語として解釈できる。対して「sie」を1格として理解すれば、直後の「彼らは」と同じく次の文の主語として解釈できる。ここでは前者の解釈を採用した。なぜなら、神的なものを「ありのまま (sichtbar)」(Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914-1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 813)に見るという行為が直前のセメレーの比喩で言われており、「selbst」がその「ありのまま」さを指していると解釈するからである。また、もし1格と見なした場合、「彼ら自身は、彼らは」と主語が繰り返されることになるが、そのことに4格と解釈する以上の重要な意味はないように思われるからでもある。

49 Ebd., S. 813f.

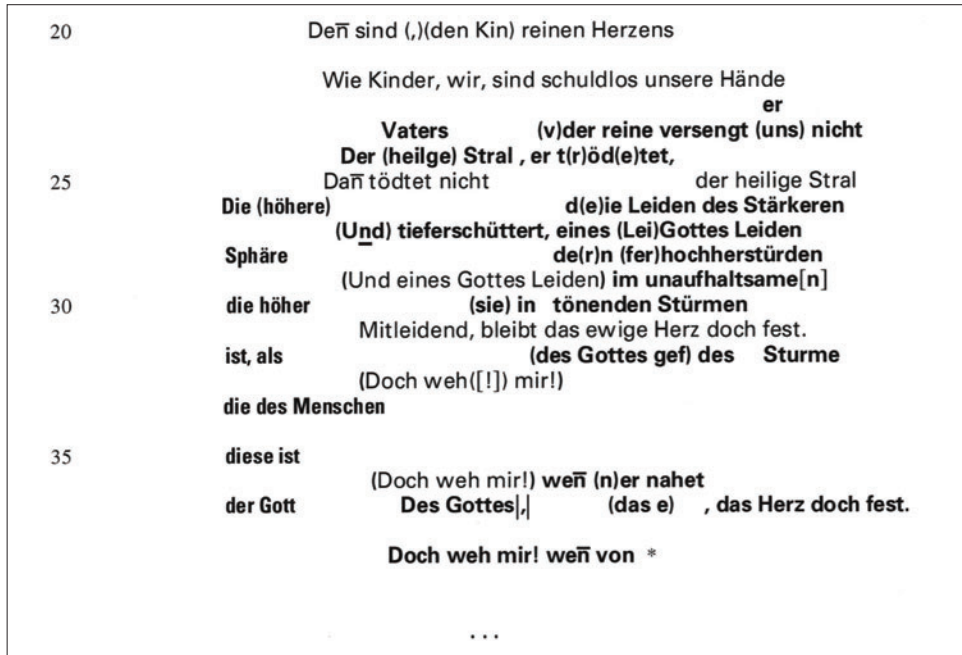


図1 欠落部の前半部分⁵⁰

31行目の「ともに苦悩しつつ、永遠の心はそれでも確固としたままだ (Mitleidend, bleibt das ewige Herz doch fest)」の後にある、同じフォントで書かれた「しかしつらい! (Doch weh mir!)」は、括弧に入っているため削除されたことを示している。そのため、ツィンカーナーゲルはテキスト化していない。ページの左側にも文字が書かれている(26行目の「Die (höhere)」以降)が、これはインクの違いから後から書き足された関係のない部分だと見なされ、別のフォントになっている⁵¹。ツィンカーナーゲルが次にテキスト化しているのは、38行目の「しかしつらい! もし [...]」によって (Doch weh mir! wenn von)」である。彼がそうした理由は、これと同じ時期に書き入れられた37行目の「das Herz doch fest」が31行目の「das ewige Herz doch fest」の繰り返しだという判断に基づき、その続きが「Doch weh mir! wenn von」であると考えたからだと思われる。その後の中略を示す「[...]」が書き入れられ、このページは終わっている。ツィンカーナーゲルは「wenn von」の後から「・」を数多く記載しているが、手稿では下の行に「[...]」と書かれているだけであり、恣意的に点の数が増やされている。次に欠落部の後の後半部分に目を向ける。

⁵⁰ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Bd. 7. Hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main/Basel 2000, S. 106.

⁵¹ この部分の訳は「(より高き) / 領域 / 人間の / よりも / より高き / これが / 神だ」となり、詩に含まれると見なせるかは難しいが、内容的には連関が見て取れる。

Die letzte Stunde. Im Walde.		
Die Ro]se	Die Schwäne.	Der Hirsch.
		Du (E)edles Wild.
	und trunken []von	Aber in Hütten wohnt der
	Küssen taucht ihr	u. hüllet sich ein ins
	das Haupt ins hei-	Mensch, (d) (deñ iñiger)
holde Schwester!	lignüchterne kühle (l)verschämte Gewand, deñ	
	Gewässer.	iñiger ist achtsamer auch
Wo nehm ich, weñ es Winter, ist		er den
		u. daß(zu) bewahre(n), (daß)
Weh mir!		Geist, , wie die Prie-
[Die] Blumen, daß ich Kränze den Hiñmlischen		sterin die hiñmlische
winde?		F(a)lame, diß ist sein
Dañ wird es seyn, als wüßt ich niñmer von Göttlichen,		Verstand.
		(Da)Und darum ist
Deñ (weñ)von mir sei gewichen des Lebens Geist,;		die Willkür ihm
Weñ ich den Hiñmlischen die Liebeszeichen		u. (alle)
Und[] (sa(h)g ich gleich,)		u. höhere
Die Blumen im (nakten) kahlen Felde suche		Macht
u. dich nicht finde.		(Macht)
Ich sei genaht, die Hiñmlischen zu schauen,		zu fehlen(),u.
Sie selbst, sie werfen mich tief(),unter (L)die Lebenden		zu vollbringen
	ins Dunkel	alle
Den falschen Priester(),(hinab,)	(hinab) []	dem Götterähnli-
[]) daß ich		chen, (und da-)
(Das)(E)Das warnende Li(d)ed (G)elden Gelehrigen singe.		(rum ist) der
Dort		Güter Gefähr-

図2 欠落部の後半部分⁵²

この前のページからの続きは、内容的な結びつきやインクの状態を勘案すると17行目の「つらい！（Weh mir!）」である。写实的転写では、3行目の「薔薇（Die Rose）」「白鳥（Die Schwäne）」「鹿（Der Hirsch）」「汝、高貴なる野生（Du E(e)dles Wild）」、10行目の「優美なる姉妹よ！（holde Schwester!）」も同じフォントに見えるが、実際に手稿の写真版を確認すると、明らかにインクの太さと濃さが異なっている⁵³。それゆえ、このページにははじめ、「Weh mir!」に至るまでかなりの空白があったと考えられることから、ヘルダーリンは他の詩句の挿入をあらかじめ想定していたことが推測される。実際に、以前の第1稿にはこの箇所に数行程度の記述がある。しかし第2稿では、結局そ

⁵² Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Bd. 7, S. 107.

⁵³ Vgl. ebd., S. 108.

ここに『あたかも祝いの日に…』に直接関係のある言葉が書き入れられず、後に『生の半ば (Hälfte des Lebens)』(5行目の「und trunken [] von」からの部分と14行目の「Wohn ich, wenn es Winter ist」からの部分)や『森の中で (Im Walde)』(6行目の「Aber in Hütten wohnt der」からの部分)という別の詩が書き入れられることになった。

ツィンカーナーゲル版のテキストと比較すると、彼はこの「Weh mir!」をテキストとは見なさず、加えて40行目の「そこでは (Dort)」もテキストと見なしていないことがわかる。一方、この「Weh mir!」と「Dort」は、シュトゥットガルト版においてはテキストと見なされているように⁵⁴、テキストと見なせる部分でもある。にもかかわらずツィンカーナーゲルが省略したのは、現在検討している第2稿ではなく第1稿において「weh mir!」が線を引かれて削除され、「dort」も書かれていないためだと思われる⁵⁵。また、26行目の「私がたとえ言っても (sag ich gleich)」が第2稿では削除されているにもかかわらず、ツィンカーナーゲルがこれを削除とは見なさずにテキストに組み入れているのも、第1稿では削除されていないことを受けている⁵⁶。

このようにツィンカーナーゲルは、いくつもの箇所第1稿の方を優先させているが、逆に第2稿の方を優先している箇所もある。例えばこの詩の最初の行は、第1稿では「あたかも農夫が祝いの日に畑を (Wie wenn der Landmann am Feiertage das Feld)」となっているが⁵⁷、第2稿の「あたかも祝いの日に、畑を見に (Wie wenn am Feiertage, das Feld zu sehn)」がテキストに採用されている。また、第1稿には「wenn von」の後の空白部に「別の [矢] / 自分でつけた傷 (anderem [Pfeile] / selbst geschlagener Wunde)」(「/」は改ページを意味する)で始まる詩行が数行書かれているものの、ツィンカーナーゲルは第2稿に則って空白のテキストを作成している⁵⁸。なぜあるときは第1稿を、あるときは第2稿を優先させたのかについて、ツィンカーナーゲルは資料篇では何も説明していない。そのため、二つの稿のうちどちらを優先するかの基準は場当たり的であいまいであるように見える。例えばミヒャエル・クナウプ編集によるミュンヘン版全集は第1稿と第2稿を区別し、別のテキストとして掲載するが⁵⁹、ツィンカーナーゲルは異なった二つの稿があるとは考えず、自由に組み合わせられると考えているように見受けられる。つまり、ここでは客観的な実証性よりも、ツィンカーナーゲル個人の恣意性が強く表れているのだ。

そしてツィンカーナーゲルの編集を相対化するために、ヘリングラート版のテキストがどのようになっているか見てみよう。

というのも純粹な心でありさえすれば、

⁵⁴ Vgl. Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. von Friedrich Beißner. Bd. II/1. Stuttgart 1951, S. 120.

⁵⁵ Vgl. Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Bd. 7, S. 99.

⁵⁶ Vgl. ebd.

⁵⁷ Ebd., S. 95.

⁵⁸ Ebd., S. 96, 99.

⁵⁹ Vgl. Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke und Briefe. Münchner Ausgabe. Hrsg. von Michael Knaupp. Bd. 1. München/Wien 1992, S. 259–264.

子どもたちのように我々が、我々の手が無垢ならば、
 父の光線、その純粹なものは焦がすことはないからだ、
 そして深く打ち震えながら、神の苦悩を
 ともに苦悩しつつ、永遠の心はそれでも確固としたままだ。

Denn sind nur reinen Herzens,
 Wie Kinder, wir, sind schuldlos unsere Hände,
 Des Vaters Stral, der reine versenget nicht,
 Und tieferschüttert, eines Gottes Leiden
 Mitleidend, bleibt das ewige Herz doch fest.⁶⁰

ヘリングラートはこれ以降の部分を資料篇には収録しているものの⁶¹、テキストでは欠落部の前で止めてしまい、それ以降は完全に削除してしまっている。これはまるで、欠落部以降はもともと存在せず、この詩が完結しているかのような印象を与える。加えて、欠落部前の部分も多少ツィンカーナーゲル版とは異なっており、特にツィンカーナーゲル版の5行目「とどまることのない嵐の中で高みより落ちてくる苦悩を」が丸々抜けている（この部分も資料篇には記録されている）。

欠落部をテキストに勘案しないのは、ヘリングラート版の他、この詩の初出である、詩人ゲオルゲが編集した『ドイツの詩』（1910年⁶²）にも見られる編集手法だ。ツィンカーナーゲル版が欠落部もテキストと見なして以降、シュトゥットガルト版以降の全集は、どの言葉をテキストに採用するかには多少のブレがあるものの、大体においてはツィンカーナーゲル版を踏襲して欠落部をテキストとして収録している。それでは『ドイツの詩』やヘリングラート版はなぜテキストから除外したのか。まず考えられるのは、欠落部以降の内容がそれまでの詩の内容にそぐわないという点だ。欠落部の前と後とでは詩人の描かれ方が180度転換しており、そのために無視することになったと推定される。ゲオルゲにとって詩人とは予見者（Dichterseher）であり、神秘的で英雄的な性格を持っている。ゲオルゲはそうした詩人像を（意識的にせよ無意識的にせよ）『あたかも祝いの日に…』にも投影した結果、欠落部の前で詩が完結していると判断した可能性が高いと考えられる。そしてゲオルゲに近い人間だったヘリングラートもその見方を積極的に（あるいはゲオルゲに付度して消極的にという可能性もあるが）踏襲しているのだ。

ヘリングラートの方が早く詩の巻を出版していたために、ツィンカーナーゲルはヘリングラート版を参照して自らの版に活かすことが可能な立場にあった。そのため、ヘリングラートとの差異を明確に示すために、意図的に欠落部も含んだ別の形のテキストを構成した可能性も考えられる。ツィンカーナーゲル自身は、欠落部をテキストに組み入れたことについて、資料篇で次のように説明している。

⁶⁰ Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke. Bd. 4. Hrsg. von Norbert von Hellingrath. München/Leipzig 1916, S. 153.

⁶¹ Vgl. ebd., S. 341.

⁶² Stefan George, Karl Wolfskehl (Hrsg.): Deutsche Dichtung. Bd. 3: Das Jahrhundert Goethes. 2. Aufl. Berlin 1910, S. 50f.

ヘルダーリンがそのディテュランボスの讃歌に、そのようなくすんだ結部の和音を実際に書き加えようとしたことは、それ自体驚くべきものに見えるかもしれないが、手稿の状況に向き合ったなら、議論を戦わせる余地はおそらくほとんどないだろう。⁶³

ツィンカーナーゲルは手稿にできるだけ忠実であることを重視し、自信を持って欠落部の掲載に踏み切った。裏を返せば、欠落部をテキストから排除したヘリングラートは手稿に誠実に向き合っていないと暗に批判してもいるのだ。欠落部の掲載は、ツィンカーナーゲルの文献学者としての実証主義的態度を示すと同時に、ヘリングラートに対する強い示威行為でもあったと言えるだろう。

ただし手稿に忠実であることにに関して、資料篇を見ても首をかしげざるを得ない点はいくつも残されている。例えばタイトルがつけられていない詩に対して、恣意的にタイトルをつける行為はどうであるのか。確かに初出時にゲオルゲも「讃歌 (Hymne)」というタイトルをつけている。ツィンカーナーゲルはそれと異なった「聖なる火」というタイトルを括弧に入れて留保した形でつけてはいるものの、ゲオルゲと同様の行為をしていることは否定できない。また、第2稿でヘルダーリンが線を引いて削除している箇所を、第1稿で削除されていないからといってテキストに組み入れる根拠は何であるのか。そして、逆に第2稿を優先している箇所もあるのはなぜなのか。こうしたことについては、資料篇でも明確な根拠が提示されていない。これは、ツィンカーナーゲルが編集方針として掲げていたように、全体に関わるものではなく個々の箇所のみに関わるものであって、記録する必要のないものだと本当に言えるのだろうか。もちろんこの点についても注釈がきちんと書かれていたものの、原稿の保管が上手くいかずに失われてしまった可能性も考えられなくはない。いずれにせよツィンカーナーゲルの資料篇には、すべてのヴァリエーションを記録した上で、それらの取舍選択を通じて一つのテキストを構成した際の根拠もすべて記録することの困難さが読み取れると言えるだろう。

6. おわりに

これまでの考察をまとめる。ツィンカーナーゲル版全集がこれまであまり注目されず、ヘリングラート版などの陰に隠れてきたのは、資料篇が出版されなかったことが大きな要因だった。資料篇が出版されなかったのは、同時代のヘリングラート版の成功が大きく影響していた可能性が高い。しかし近年資料篇が出版され、ツィンカーナーゲルの編集の意義を批判的に考えることが可能になった。

ツィンカーナーゲルの編集方針としては、ヘルダーリンの手稿に忠実であることが重視され、ヘルダーリンが手稿に書いていることをそのまま文字化して、彼の書いた言葉をできるだけすくいあげ、手稿を再現できるような資料篇を作ろうとしていることが見

⁶³ Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte, Teil 2, S. 821.

て取れる。このことに、ツィンカーナーゲル版の学術版編集上の特徴と意義があると言える。しかしその一方で、何を「編集されたテキスト」に組み入れ、何を削除するかについての根拠づけや説明が資料篇に欠けている場合も実際には数多く存在する。一つのテキストを編集する以上、恣意性は完全に排除することはできないため、それに誠実に対処することが求められる。したがって、実証性を標榜しつつ、恣意性とは真正面から向き合い切れなかったのがツィンカーナーゲル版であると言えるだろう。

もっとも、ツィンカーナーゲルの編集は全体としては評価すべきものだと思われる。彼は『あたかも祝いの日に…』の欠落部をテキストとして収録し、この詩を未完成で断片化している詩として提示した。対して欠落部を除外したヘリングラートは、この詩を首尾一貫し整った内容を持つすでに完成した詩として提示している。この両者のうち、どちらがヘルダーリンの手稿に近いテキストを提示することに成功しているかは言うまでもない。

ツィンカーナーゲル版はこれまでヘルダーリン研究においてほとんど無視されてきたが、現在ようやく研究対象となる基盤が整いつつある。ヘルダーリンが一躍ドイツ文学の古典にのぼりつめた20世紀前半という重要な時期の学術編集版として、ツィンカーナーゲル版が担った役割はこれまで軽視されすぎていたと言える。ツィンカーナーゲル版がヘルダーリン研究において、数ある全集のうちの単なる一つとして歴史的な意味しか持たないのか、それとも資料篇も含めて内容的に現在でも参照する価値があるのかは、今後の検討の中でさらに明らかになっていくだろう。

文献表

- Bothe, Henning: „Ein Zeichen sind wir, deutungslos“. Die Rezeption Hölderlins von ihren Anfängen bis zu Stefan George. Stuttgart 1992.
- George, Stefan; Wolfskehl, Karl (Hrsg.): Deutsche Dichtung. Bd. 3: Das Jahrhundert Goethes. 2. Aufl. Berlin 1910.
- Hellingrath, Norbert von: Pindarübertragungen von Hölderlin. Prolegomena zu einer Erstausgabe. Jena 1911.
- Hoffmann, Dierk O.; Zils, Harald: Hölderlin-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth (Hrsg.): Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte. Tübingen 2005, S. 199–245.
- Hölderlin, Friedrich: Gesammelte Werke. Bd. 2. Hrsg. von Paul Ernst. Jena/Leipzig 1905.
- Hölderlin, Friedrich: Hölderlins Werke. Teil 1. Hrsg. mit Einleitung und Anmerkungen versehen von Marie Joachimi-Dege. Berlin 1908.
- Hölderlin, Friedrich: Gesammelte Werke. Bd. 2. 2. vermehrte Aufl. Hrsg. von Wilhelm Böhm. Jena 1909.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. 6 Bde. Begonnen durch

- Norbert v. Hellingrath; fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. München 1913–1923.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke und Briefe. Kritisch-historische Ausgabe. 5 Bde. Hrsg. von Franz Zinkernagel. Leipzig 1914–1926.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. 8 Bde. Hrsg. von Friedrich Beißner. Stuttgart 1943–1985.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. 20 Bde. Hrsg. von D. E. Sattler. Frankfurt am Main 1975–2008.
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke und Briefe. Münchner Ausgabe. Hrsg. von Michael Knaupp. Bd. 1. München/Wien 1992.
- Hölderlin, Friedrich: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. Lesarten und Erläuterungen mit dem Text herausgegeben von Hans Gerhard Steimer. Teil 1: Herausgeberbericht mit Benutzung einer Briefedition von Frank Hieronymus. Teil 2: Edition beiliegend auf CD. Göttingen 2019.
- Lange, Wilhelm: Hölderlin. Eine Pathographie. Stuttgart 1909.
- Metzger, Stefan; Kreuzer, Johann (akt.): Editionen. In: Johann Kreuzer (Hrsg.): Hölderlin-Handbuch. Leben–Werk–Wirkung. 2., revidierte und erweiterte Aufl. Berlin 2020, S. 3–14.
- Plachta, Bodo: Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition. Stuttgart 2020.
- Reitani, Ruigi [Rezension]: Friedrich Hölderlin: Kritisch-historische Ausgabe von Franz Zinkernagel 1914–1926 Werkteil Gedichte. In: Hölderlin-Jahrbuch. Bd. 41 (2018–2019), S. 251–255.
- Zeller, Hans: Zur gegenwärtigen Aufgabe der Editionstechnik. Ein Versuch, komplizierte Handschriften darzustellen. In: Euphorion 52 (1958), S. 356–377.
- Zinkernagel, Franz [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe unter Mitarbeit von Friedrich Seebaß besorgt durch Norbert v. Hellingrath. 5. Bd.: Übersetzungen und Briefe 1800–1806. München und Leipzig 1913, bei Georg Müller. In: Euphorion 21 (1914), S. 356–363.
- Zinkernagel, Franz [Rezension]: Hölderlin, Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe, begonnen durch Norbert v. Hellingrath, fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v. Pigenot. 4., 3., 2., 6. Bd. In: Euphorion 25 (1924), S. 274–287.
- Zinkernagel, Franz: Die Entwicklungsgeschichte von Hölderlins Hyperion. Berlin 2018 (Original: 1907).
- Zinkernagel, Franz: Briefe und Schriften aus dem Nachlass. Hrsg. und kommentiert von Frank Hieronymus. 5 Bde. Basel 2020.

The Historical-Critical Edition of Hölderlin out of the Limelight: Zinkernagel and His Edition

Hideya HAYASHI

This paper focuses on the historical-critical edition of Hölderlin edited by Zinkernagel, which has received little attention in Hölderlin studies. The Zinkernagel's edition has been disregarded because its editorial material (apparatus), the core of the historical-critical edition, had not been published at the same time. However, its publication in recent years has laid the foundation for research. According to the editorial material, Zinkernagel is oriented toward empirical philology, presenting the process of textual genesis by documenting as many variants as possible, and trying to create an editorial material with which the manuscripts can be reconstructed. This policy was progressive at the time. Zinkernagel also criticizes the Hellgrath's edition for its arbitrary editing, which ignores Hölderlin's mental illness and just glorifies his works. In contrast to Hellgrath, who presented the false completeness of "Wie wenn am Feiertage..." by excluding its fragmented part at the end from the edited text, Zinkernagel succeeded in presenting the unfinishedness of the poem by textualizing the fragmented part. However, in some places Zinkernagel also appears to have made arbitrary choices without providing a clear justification for which manuscript words to adopt, which indicates the difficulty of documenting everything involved in the editing process in the editorial material.